九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

W.J.キャッシュと南部の神話

小谷, 耕二
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/5421

出版情報：言語文化論究. 8, pp.77-88, 1997-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

W.J. キャッシュと南部の神話

小 谷 耕 二

W.J. Cashの*The Mind of the South*（1941年）は南部についての神話を破壊した書として知られている。キャッシュは＜旧南部＞が貴族的な社会だという通念を打ち壊し、返す刀で、産業化による進歩と商業の支配を唱道する＜新南部＞が＜旧南部＞とは基本的に異質なものだという通念も突き崩した。[1] ただこの著作はアカデミックな厳密さを欠いており、正統的な歴史研究とはいえない。「一頁一頁が血で書かれた」[2] とキャッシュ自身が述べたとおり、むしろ、南部の歴史に対する苦渋に満ちた省察から生まれたきわめてパーソナルな著作である。このことが出版後50年以上を経た現在でも関心を呼びおこす所以のひとつであろう。つまりキャッシュ自身の苦悩や願望が知らず知らずのうちに歴史解釈に色濃く反映している。そこに単なる客観的な歴史ではなくて、ひとりの知識人の、その存在のすべての重さと力をこめた知的営みを読み取ることができるのである。したがって、『南部の精神』は純粋に学問的な立場からの評価だけではなく、広い意味での文学、また文化史・思想史の対象となる著作として評価する必要があろう。そうした観点から見た場合、キャッシュとその著作がどのような意義をもつかを検討することが小論の狙いである。

I

まず、この50年余りの間『南部の精神』がどのような評価を受けてきたかを、主としてJames C. Cobb の論文に依拠しつつ概観し、問題点の所在を明らかにしておきたい。[3]

『南部の精神』が出版されたのは1941年だが、出版直後の書評はいたって好評であり、歴史学者だけではなく、ジャーナリストや文学者からも賞賛をあびた。Jack Temple Kirby によれば、2か月で1400部が売れ、出版元の Alfred Knopf はすぐに第2刷を準備したという。[4] こうした好評には当時の南部の知的思潮がその背景に あったことを、コブは指摘している。[5] 南部では1920年代の後半から南部文芸復興と称される知的活動が表面化してくる。それまで農業中心の社会だった南部に次第に産業化の波が押し寄せて来始めたのにともなって、南部は一種のアイデンティティ・クライシスを経験することとなった。そして、その危機感がバネとなって、みずからの過去を吟味し、新たな南部像を求める動きがさまざまの分野で生じてきたのである。周知のように、文学の分野では William Faulkner の出現や、Allen Tate をはじめとする Nashville Agrarians の活動がこの動きに含まれる。また、North Carolina 大学 Chapel Hill 校では Howard W. Odum, Rupert B. Vance, Arthur F. Raper といった一群の社会学者が、過去の神話的な南部像にとらわれないリアリスティックなまなざしによって南部の姿を明らかにしつつあった。歴史研究の分野では、若き C. Vann Woodward が、南部の歴史に統一と結束と

持続とを見るという、当時の南部史学界に成立していたコンセンサスに挑戦の狼煙をあげていた。ジャーナリズムの世界でも、Virginius Dabney (*The Richmond Times-Dispatch*), Jonathan Daniels (*The Raleigh News and Observer*), J.E. Dowd (*The Charlotte News*) といった面々が、人頭税やリンチ反対のキャンペーンを繰り広げ、スラムや貧困といった社会問題に勇敢なリベラリズムの論陣を張っていた。[6] キャッシュの『南部の精 神』はこうした知の潮流に棹差していたのである。

『南部の精神』に表明されたキャッシュの歴史理解は、大筋において、南部人の精神のパターンが南部史に一貫して持続しているというものであった。[7] その意味では、当時の南部史学界の伝統的 な統一・持続史観に依拠していた。[8] だが同時に、キャッシュは南部の現状に深い危惧と侮蔑とを抱いていた。30年代の不況期、南部はアメリカの第一の経済的問題児であり、また H.L. Mencken が筆法鋭く批判したように、文化的にも不毛の地であった。[9] そうした状況のなかでキャッシュは、南部の抱える問題の根源を明らかにし、その解決の方途を模索しなければならないという切迫した気持ちを抱きながら、新聞や雑誌にメンケン張りの論説を発表していたのである。もちろん『南部の精神』にもこうした意気込みがあふれており、その点で、この著作は、神話のヴェールを引き剝がし、南部の過去を凝視しようとする南部文芸復興の思潮を体現するものだったのだ。

好評はこの手の著作にしては異例の25年間も持続した。その華々しいデビューぶりもさることながら、南部についての参考書といえばほとんど誰もがまずこの著作をあげるという事態が四半世紀も続いたのである。[10] ウッドワードの評を借りれば、「南部史に関する書物で、門外漢の間での影響力においてキャッシュの著作に匹敵するものは一冊もなく、専門の歴史家の間においてもこれほどの影響力をもったものはざらにはなかった」[11] ほどの古典的地位に君臨したのであった。コブの指摘によれば、第二次世界大戦を経て、アメリカが自由主義世界のリーダーになったという事情がここには介在していた。冷戦構造のなかで、世界の警察官としての、また民主主義と資本主義の模範としての役割を果たさねばならなかったアメリカにとって、すべての面で後進的な南部をみずからの価値観に同質化することが緊急の政治課題となった。とくに、公民権運動の模様がマス・メディアを通じて全国に報道されることで、南部に対する関心はいやがうえにも高まっており、その習俗や制度を批判し、改善する必要があった。そこで『南部の精神』はそうした関心の高まりに応えてくれる簡便で手頃なガイドブックの役割を果たすことになったのだった。おりしも1960年にペーパーバック版が出版され、『南部の精神』は全国の大学で必読課題図書のリストに載ることになったのである。[12] 加えて、キャッシュのジャーナリスト特有の人目を惹く簡潔なネーミングやレトリカルな表現、それにめりはりのきいた文章力も、好評の持続に貢献していたであろう。

しかし1960年代後半になると事情は一変して、キャッシュ批判が噴き出してくる。公民権運動を経て、南部が社会的にも経済的にも大きな変化を遂げると、南部社会の抱えていた問題点を喧伝することよりも、その起源を学問的に探究することに歴史学者たちの関心は向いていった。その過程でキャッシュの著作も学問的吟味の俎上に上げられたのである。[13]

キャッシュ批判の急先鋒となったのが、ウッドワードであった。『南部の精神』が出た当初好意的な書評を寄せていたウッドワードは、数回にわたってキャッシュ批判をおこなった。[14] 彼はすでに *Origins of the New South* (1951年) 及び *The Strange Career of Jim Crow* (1955年) という2冊の学術書によって南部史学界に確固たる地位を築いており、その批

判は厳密なアカデミズムの立場からのものであった。その骨子は次のとおりである。①キャッシュは故郷のカロライナの Piedmont 台地一帯をもとに南部像を構築しており、南部の地理的多様性を無視している。②時代的には、扱われているのは1830年代から1930年代までであって、植民地時代が無視されている。③「精神」というタイトルがついているにもかかわらず、南部の代表的「精神」、Thomas Jefferson、James Madison、John C. Calhoun らを取りあげていない。④旧南部の統一を強調するあまり、南部における奴隷制度廃止論者や連邦主義者、共和党支持者の存在を無視している。⑤黒人を人格を備えた個人として捉える視点がほとんど欠落しており、奴隷制度も十分に扱っていない。⑥南部の歴史の持続性を強調しすぎており、(特に黒人にとっての) 再建時代の法的・社会的諸変革の重大さを無視している、等々である。

こうした批判のひとつひとつは、『南部の精神』を純粋な学問的客観性の次元で評価する際には正鵠を得たものといわざるをえないであろう。煎じ詰めれば、キャッシュが南部の統一性とその歴史の持続性を強調した点を、ウッドワードは衝いたのである。ウッドワード自身は旧南部の政治的多様性や再建期の制度上の変革を重視し、ポピュリズム運動の階級闘争の側面を強調する立場であった。また農業社会からの南部の変貌を「ブルドーザー革命」[15] と名付け、さらには公民権運動による南部社会の変化をまのあたりにしていた。つまり、多様性と非連続性の歴史観の持主であり、その意味では彼のキャッシュ批判は生じるべくして生じたものであったといえよう。ただ、ウッドワードがキャッシュには歴史の悲劇性に対する感覚が欠けていたと述べるとき、[16] その批判には首を傾けざるを得ない。『南部の精神』に底流しているのは、キャッシュ謂うところの＜原始ドーリス式因習 (the Proto-Dorian convention)＞や＜野蛮人の理想 (the savage ideal)＞が南部人独特の強烈な個人主義や享楽主義と相俟って、悲劇的な歴史を生み出してきたことへの、やりきれぬ悲しみと怒りにほかならなかったからだ。[17] いずれにせよ、ウッドワードの批判はその徹底性と卓越性とにおいて強大な影響力をもっていた。

その後マルクス主義史学の立場から Eugene D. Genovese の批判が続くことになる。ジェノヴィーズは、①キャッシュが奴隷制度に対する南部白人の罪悪感を強調しすぎており、また②プランター階級が貴族的生活様式をもっていたという神話を破壊しようとして、逆にキャッシュ自身「貴族」というものの美化された観念に憑かれてしまっていると批判した。[18] これらの強力な批判のせいで、その後70年代まではキャッシュは無視されることになった。コブの指摘によれば、数多くの歴史学者たちは研究のテーマがキャッシュが取り上げたテーマに関連する場合でも、直接キャッシュの名を引き合いに出すこともなかったという。

しかし80年代になって、キャッシュ批判に対する反批判が現われてきた。Bruce Clayton, Fred Hobson, Richard H. King, Bertram Wyatt-Brown らの文化史家・思想史家が、キャッシュの着想の多くが有効であることを示し、また歴史学者たちのなかからも、南部史の非連続性を強調するウッドワードの所説を批判するものが現われてきたのである。[19] ウッドワードの多様性・非連続性の歴史観は、南部社会の構造や制度面の変革に着目した見解であった。一方、キャッシュが問題にしていたのは、南部人の精神のパターンであり、それが歴史の事象の諸変化を貫いて脈々と底流しているというのが、彼の歴史観の眼目であった。Nietzshe や Freud の著作に親しんでいたキャッシュは、人間の精神がその無意識の闇に巣食う非合理的な思考や感情に左右されることに通暁していた。彼が南部の歴史に見たものは、＜原始ドーリス式因習＞や

＜野蛮人の理想＞といった形で発現する、南部人の精神の闇だったのだ。そうした立場からすれば、歴史の現象面での多様性や非連続性の比重は当然軽くなってしまう。だが、むしろそうした精神の闇へのまなざしこそが、時代的な制約にもかかわらず、黒人の存在が南部白人の心理に及ぼす影響や、南部女性が神話的象徴として担う権力支配の機能への卓抜な洞察を可能にしたのであった。したがって、ウッドワードとキャッシュの立脚点はおのずと異なっており、しかもそれはいずれかの史観によって相手を完全に断罪できるという性質のものではなかったのである。

キャッシュ評価にまつわるこうした動きは、アメリカの社会風潮の変遷にも連動していた。公民権運動後、ベトナム戦争やウォーターゲート事件によって、正義と進歩を標榜するアメリカ的価値観に対する幻滅感がひろがり、大都市や工業地帯での貧困、犯罪、暴力も増大した。80年代の経済的停滞にともない、社会的な抑圧が増大するにつれて、南部以外の地域での人種的摩擦も表面化した。アメリカの「南部」化、アメリカの「南部」的要素の顕在化という事態が現出するに至ったのである。コブの見るところでは、この状況は南部的でない Jimmy Carter と南部的な Ronald Reagan という二人の大統領の個性や政治手法に見られる逆転現象に象徴されている。失業や低賃金といった南部的な経済状況がアメリカ全土に蔓延し、政治家たちは不満を人種間の対立に解消するという＜原始ドーリス式因習＞的政治手法に訴えるようになってきたと、コブは指摘している。[20] こうして、キャッシュの南部の独自性という論点は説得力を失うことになった。だが、逆に彼が南部人のなかに見た＜原始ドーリス式因習＞や＜野蛮人の理想＞は、決して南部人特有のものではなく、アメリカ人全体についてもあてはまる普遍的な精神のメカニズムであることが、次第に明らかとなってきたのである。

II

キャッシュ評価の動向を概観することによって明らかになるのは、『南部の精神』が学術的な歴史研究としてみればきわめて欠陥の多い著作だということである。膨大な史料考証にもとづいた正確な史実の細部の確定と解釈といった手続きはおおむね無視されており、通常の歴史研究のいわゆる客観的な史実の叙述からは、はなはだしく逸脱している。その点では、現在の南部史研究の水準から見て古色蒼然たる著作であることは如何ともしがたいであろうし、[21] そもそも歴史研究ではないという見解も当然ある。[22] しかし、南部の歴史に底流し、それを動かしてきた南部人の精神のパターンに対する洞察は現在でもなお古びていない。それどころか、先に見たとおり、80年代以降のアメリカの社会風潮はむしろその普遍的な妥当性を裏付けてもいるのである。その洞察の中核となる＜原始ドーリス式因習＞と＜野蛮人の理想＞についてはすでに前稿で触れているので、[23] ここではキャッシュが見た、南部人の黒人観と女性観を検討しておく。南部人の精神の闇の発現がここにも如実に窺えるのである。

先に見たとおり、ウッドワードのキャッシュ批判のなかに、黒人に対する考察が不十分であることが含まれていた。白人に対する影響の考察はあっても、黒人の精神それ自体の本質的な意義や起源の問題をキャッシュが扱っていないことを、ウッドワードは指摘していた。この点についての批判はその後も繰り返されており、一定の妥当性を有しているといってよいだろう。たとえば、Michel O'Brien は、黒人の造型が多かれ少なかれレイシスト的であると述べ、[24] Edward L. Ayers も、キャッシュは黒人には関心がなく、今日の水準から見れば、レイシストと見なさざるを得ないことを指摘している。[25] こ

れらの批判者たちは、キャッシュの黒人に対する理解の浅さないしは無理解が、奴隷制度の考察の欠如や再建期についての歪曲された解釈につながっていると考えている。キャッシュが持続史観を採り、再建期が真に変革の時代であったことを認識し得なかったのは、黒人の立場への視点が欠如していたからだというわけである。[26] 黒人女性の Nell Irvin Painter はフェミニズムの立場からキャッシュをレイシストにしてセクシストと見なし、その欠陥がキャッシュの南部の歴史と文化の探究を歪めてしまったと、容赦なく糾弾している。[27]

こうした批判の根拠となっている黒人の描写をいくつか拾いあげておく。

(1) ...but the Negro is notoriously one of the world's greatest romantics and one of the world's greatest hedonists. I am well aware that, when it is a question of adapting himself to necessity, he is sometimes capable of a remarkable realism. But in the main he is a creature of grandiloquent imagination, of facile emotion, and, above everything else under heaven, of enjoyment. (49)

(2) [The South] must prettify the institution [of slavery] and its own reactions, must begin to boast of its own Great Heart. To have heard them talk, indeed, you would have thought that the sole reason some of these planters held to slavery was love and duty to the black man, the earnest, devoted will not only to get him into heaven but also to make him happy in this world. He was a child whom somebody had to look after. More, he was in general, and despite an occasional spoiled Nat Turner, a grateful child — a contented, glad, loving child. Between the owner and the owned there was everywhere the most tender and beautiful relationship. (83)

引用(1)は、南部人の非現実性への傾斜、その根深いロマンティシズムと享楽主義的傾向について述べたくだりである。キャッシュによれば、南部人のこうした特性はプランテーション制度のもとでいっそう拍車がかかった。貧しいヨーロッパの小作農やニューイングランドの農夫には想像もできないほど労働から解放され、窮乏の心配に悩まされることがなくなったからである。これに、社会経済の問題についての関心の希薄さ、努力によって何事かを達成することに対する誇りの欠如といった要因が加わって、南部人は労働に無関心になり、ほかのことにエネルギーを向けるようになった。それを助長したのが、プランテーションにおける黒人の存在であった(第1部2章8節)。そういう文脈にこの一節は出てきている。ここでは黒人は陽気で、自然で、想像力にあふれ、生来のロマンティスト、享楽主義者として描かれている。同時に、抜け目のない現実主義もあわせもった存在である。奴隷制度の苛酷さとはほとんど無縁の黒人像であり、白人の眼から眺めたひとつのステレオタイプと見ることができる。

引用(2)は、南部人のセンティメンタリティへの傾斜をヤンキーとの葛藤という角度から説明しているくだりである。キャッシュは南部ほどヴィクトリア朝風の思潮が共感をもって受け入れられた場所はないと前置きしたうえで、北部からの奴隷制度批判に対して、南部は主人と奴隷の関係を美化する必要があったと、述べている。たとえ両者間に実際に親密で人間的な関係があったとしても、奴隷制度自体が力による支配と服従の関係にもとづ

いていることは否定しがたい事実であった。そしてそのことに対する良心の呵責も南部人には存在していた。そこで、ヤンキーに対するディフェンス・メカニズムとして、黒人は誰かが守ってやらねばならない子供のような存在であって、主人と奴隷の間には優しく美しい関係が成立していたのだと、現実を糊塗する必要があったのだった。Uncle Tom や Jim Crow といった黒人のステレオタイプ像は、Harriet Beecher Stowe や Edwin P. Christy の創作になるものではなくて、本質的には同じディフェンス・メカニズムによって南部が作り出した構築物であって、センティメンタルに描きだされた奴隷制度の化身なのだと、キャッシュは指摘している。そして、さらに続けて、こう述べている。

(3) And what is worth observing also is that the Negro, with his quick, intuitive understanding of what is required of him, and his remarkable talents as a mime, caught them up and bodied them forth so convincingly that his masters were insulated against all question as to their reality — were enabled to believe in them as honestly as they believed in so many other doubtful things. (84)

つまり、黒人は生来の敏感さによって自分に要求されていることを感じとり、要求どおりにふるまったために、主人の方でもお互いの関係が良好だという錯覚にとらわれ、それを信じこんでしまったというのである（第1部3章9節）。ここでも黒人の反応は、白人の眼から類型化されている。

こうした例に典型的に表れているとおり、『南部の精神』において黒人はほとんどの場合白人のまなざしに映った像として登場する。独立した個性を備えた人物としてではなく、抽象化された範疇といってよいであろう。Lacy K. Ford, Jr.の表現を借りれば、白人の思考に対する「影響力」であったり、レイシズムの「犠牲者」であったり、紡績工場の労働者に対する「脅威」であったり、といった具合だ。[28] 黒人がみずからの名において、自律した行為者であることは稀で、「南部の精神」の能動的な構成要素となっているとは言いがたいのである。

したがって、現在の水準から判断して、キャッシュをレイシストと見る批判の根拠が理解できないわけではない。だが、やはりそこには一定の留保をつけるべきであろう。黒人の声を掬いとっていないという意味で、キャッシュの黒人理解に不十分な点があることは認めざるを得ないが、ひとつにはそれは時代の制約のなせるわざであった。[29] キャッシュの評伝を書いた ブルース・クレイトンは、時代背景に照らしてみて、キャッシュはレイシストではなかったと明言している。当時はレイシズムの風潮が社会に瀰漫している時代であった。悪名高い Thomas Dixon のレイシスト小説が好んで読まれ、Ben Tillman や Coleman Blease といったデマゴーグ政治家が活躍していた。KKK 団によるリンチ事件も頻発し、キャッシュがジャーナリストとして活動していた Charlotte は高い殺人率を誇っていた。こうした風潮のなかにあって、キャッシュは Wake Forest 大学で学長 William Louis Poteat の唱道するリベラリズムの 薫陶を受け、のちの社会批判の素地を養っていた。そして、ついには当時のリベラルなジャーナリズムの限界を乗り超えるところまで達したのであった。クレイトンによれば、進歩的なリベラルですら人種隔離策や黒人の選挙権剥奪を批判するに至っていないばかりか、逆に人種間の調和のためにそうした措置が必要だと考えていた。またリンチ事件に関しても、教育を受けた良識ある白人はレイシズムを克服しており、責任は白人

の大衆にあるので、彼らに教育を施さねばならないという立場であった。それに対してキャッシュはキュー・クラックス・クランの非寛容と暴力を批判したが、同時にクランの活動は白人大衆の責任ではなく、上流の人間や牧師連が裏で糸を引いているのだと、指摘したのである。黒人観の面でもキャッシュは当時のリベラルとは異なって、キャッシュには黒人のことを理解しているのだという幻想はなかったと、クレイトンは主張している。[30] したがって、キャッシュは時代の制約のなかで、むしろよく時代に先んじていたと評価するのが妥当であろう。

しかし、なによりもキャッシュが時代を先取りしていたのは、黒人の存在が南部白人に与える影響力の洞察である。[31] これも現在の眼から見れば常識にすぎないであろうが、「黒人が白人のなかに奥深く入りこみ、知らぬ間にあらゆる仕草、あらゆる言葉、あらゆる感情や考え、あらゆる態度に影響を与えた(49-50)」という認識は、当時の南部の世相のなかにそれを置いてみると、やはりきわめて斬新であったといえるだろう。この卓抜な認識は人間の精神の闇の部分、――ひとが非合理的な感情や思考や幻想に支配され、時代や環境にいつのまにか束縛されるものだということへの透徹したまなざしが可能にしたものであった。それはまた、<原始ドーリス式因習>や<野蛮人の理想>にも通底していく認識であった。

キャッシュの黒人観に関してもうひとつ注意しておかねばならないのは、その叙述の方法である。ワイアット-ブラウンは、『南部の精神』の文体が南部の雄弁の伝統、とくに弁論術の伝統に属していることを指摘し、同時にそこに19世紀のヴィクトリア朝の小説の語り手に似た声を聴きとっている。そしてそこに、語り手がある状況に反応する者の精神のなかに入りこみ、その主観性にふさわしい生き生きとした言語を再創造する手法の存在を見てとっている。[32] この手法を念頭においてキャッシュの黒人の造型を読み直すと、またちがった光景が見えてくる。たしかに、先にあげた三つの引用をそれぞれの文脈から切り離して、その字面だけを見れば、そこに浮かび上がってくるのは類型化された黒人像と、白人の側の、黒人を哀れみ見下すようなまなざしである。しかし、それは南部白人の意識に映し出された黒人像、その主観に色濃く染めあげられた黒人像なのである。南部白人のまなざしはそうした神話的ステレオタイプ像から完全に自由ではなかったであろう。だが、キャッシュはそのことを意識していた。そして南部白人のまなざしの歪みを暴露するために、故意にその主観のなかに入りこみ、その意識に立ちあらわれる生の言葉を表現したのである。要するに、キャッシュはみずからが描きだしている南部白人の意識と一体化しているわけではなく、アイロニカルな距離を置いていたのだ。こうした角度から見れば、ワイアット-ブラウンの主張するとおり、『南部の精神』のそこここに散見する、黒人に対する侮蔑的言辞も白人の側の偏見をあぶりだす一種の装置であったと考えることもできよう。[33]

キャッシュが『南部の精神』の読者として黒人を想定していなかったことはおそらく間違いないであろう。また彼が南部白人というとき、その実体は場面ごとに変化している。あるときはプランターであり、あるときは白人の庶民であり、またあるときは紡績工場の労働者であるといった具合だ。だが、女性がそこに含まれていなかったことも事実である。それはおそらく時代の制約からくるキャッシュの大きな限界であった。しかし彼は、ひとが非合理的な衝動に突き動かされる存在であり、また眼には見えぬイデオロギーや無意識の心理に支配されて、幻想や神話にすがりつくものだということを熟知していた。黒人に対するステレオタイプ像も、南部白人が必要に迫

られ、それとは知らずに構築したイデオロギーの産物だということを見抜いていた。キャッシュにとって、南部白人のまなざしの歪みをあぶりだし、南部の神話を破壊していく作業は、みずからの内なる精神の暗部を凝視し、それと対決することであったに違いない。たとえ現在の水準から見て限界があらわであるにせよ、その苦闘の軌跡のもつ重みは、時代を超えて変わらないのである。

III

黒人の場合と同様に、女性に関してもキャッシュはその生の声を著作のなかに導入してはいない。白人女性は南部の女性崇拝の対象として取り上げられるだけであり、黒人女性に至っては白人男性の性の対象物という役割が言及されるだけである。いずれも白人男性の視点から、キャッシュ謂うところの gyneolatry（女性崇拝）構築の一要因と見なされているにすぎないことを、まず指摘しておかねばならない。[34)]

南部白人の精神の闇のなかで、性と人種は分かちがたく結びついていた。キャッシュによれば、黒人の存在が南部の女性崇拝の強化に結びついており、女性は「原始ドーリス式の誇りという基本パターンの焦点（84）」となったのであった。白人女性は正統な血統によって白人優越を永続化していく存在として、また黒人男性にはまったく手の届かぬ存在として、すべての白人男性が優越感とともに団結することを可能にするものだったのである。一方、黒人女性はピューリタン的な束縛から自由な、快楽の対象であって、いつでも望めばすぐに手にすることができるものであった。プランテーションの世界で農園主やその息子が黒人女の召使と関係を持ったとき、農園主の妻は見てみぬふりをせざるを得なかった。それに対して彼らの方ではうしろめたさも手伝い、妻の前では自分を恥ずべき不純な存在であると感じた。これにヤンキーの批判が加わって、南部白人はフィクションに逃げ場を求めたのである。彼らはまずそうした性関係は存在しない、存在すれば射殺に値するものだというフィクションを作りあげた。と同時に、自分が卑劣な行為に走っているのではないかという疑念を、南部女性を美化することで補償し、追い払おうとした。そしてヤンキーに対しては、南部の美徳がいかに素晴らしいものであるかを、南部女性を引き合いにだして主張したのである（第1部3章9節）。

こうしたメカニズムにもとづいて、南部の女性崇拝は成立したのだが、キャッシュはそれを次のように描きだしている。

> The upshot, in this land of spreading notions of chivalry, was downright gyneolatry. She was the South's Palladium, this Southern woman—the shield-bearing Athena gleaming whitely in the clouds, the standard for its rallying, the mystic symbol of its nationality in face of the foe. She was the lily-pure maid of Astolat and the hunting goddess of the Boeotian hill. And — she was the pitiful Mother of God. Merely to mention her was to send strong men into tears — or shouts. There was hardly a sermon that did not begin and end with tributes in her honor, hardly a brave speech that did not open and close with the clashing of shields and the flourishing of swords for her glory. At the last, I verily believe, the ranks of the Confederacy went rolling into battle in the misty conviction that it was wholly for her that they fought. (86)

この一節はどう読み解くべきであろうか。ここに見られる過剰なレトリックはキャッシュ

自身が南部女性崇拝にのめり込んでいることを示しているのであろうか。ワイアット-ブラウンの指摘によれば、ここで南部女性に重ね合わされた複数のイメージは危険な女性とセックスレスな女性のふたつに分類できる。古代ギリシャの戦いの女神アテナと狩猟の女神 Diana は前者であり、後者には Tennyson の詩に登場する、Lancelot を愛しながらもかなわず、みずからの手で命を絶つアストラートの処女の王女 Elaine と聖母マリアのイメージが属している。ワイアット-ブラウンはこの複合的なイメージ に旧南部文化の反映ばかりではなく、セクシュアリティに対するキャッシュ自身のアンビヴァレンスを見ている。[35] それはそれで傾聴に値するが、もちろん文脈から判断して、まずは南部女性の純潔を盾に北部と戦うという含意が引き寄せたイメージであろう。

さらにこの南部女性崇拝にいたるメカニズムの説明全体が、南部人の異常なまでのセンティメンタリティへの傾斜を説き明かす文脈に置かれていることを見落とすべきではないであろう。この文脈では、レトリックが過剰であればあるほど、センティメンタリティが強調されることになるのだ。つまり、キャッシュはここでも南部白人の意識に寄り添いながら、そこにアイロニカルな距離を置いていると見てよい。南部女性のために戦うのだという「おぼろげな確信」を抱いて、南軍兵士が戦場に馳せ参じたのだと「本当にわたしはそう思う」、とキャッシュが述べるとき、そこからは字面とは裏腹なアイロニカルな響きが聞こえてくるのである。そしてキャッシュはセンティメンタリティに引きづられていく傾向が自分のなかにもあることを十分に自覚していたであろう。ここにワイアット-ブラウンのいうキャッシュのアンビヴァレンスを重ねてみれば、南部女性を崇めれば崇めるほど、キャッシュはこの神話の空疎さを意識せざるを得なかったはずであり、いっそうそのアンビヴァレンスに引き裂かれたに違いないのだ。

南部女性の神話に関していまひとつ検討しておかねばならないテーマは＜レイプ・コンプレックス＞である。キャッシュによれば、これは再建期に黒人に対する南部人の暴力を動機づけ、正当化するために生まれた神話である。キャッシュの時代には＜レイプ・コンプレックス＞はフィクションであり、南部のサディズムと経済的利害の隠れ蓑になっているという、黒人弁護の立場からの議論があり、広く流布していた。しかし、現実には黒人による白人女性のレイプの事例は少なかったが、南部人はこのコンプレックスにとり憑かれており、またそれには当然の理由があった。キャッシュの説明によると、南部女性は南部そのものと同一視されていた。この南部女性の特権的位置は人種的優越に対する誇りが女性を通して受け継がれていくところから生じ、さらにはそれが黒人男性の手の届かぬ場所にあることによって保障されていた。ところが奴隷制度の廃止にともない、少なくとも法的には黒人の社会的上昇の道が開け、それがひいては南部女性が黒人男性の手に届くようになるという見通しを開くことにもなった。そこで、黒人が完全な平等を要求することにでもなれば、黒人男性による白人女性への性的接近を禁じてきたタブーが覆されるのではないかという疑念が生まれた。そのため、黒人側の主張はどのような種類のものであれ、南部女性に対する攻撃と同義だと南部人は感じ、再建期の状況をレイプとまったく同一のものと感受したのである。ここには、白人男性の遺産を正当に受け継ぐべき息子たちの権利が侵害されることへの懸念も絡んでいた。こうして、彼らは黒人に対する暴力を正当化したのであった（第２部１章５節）。

これが＜レイプ・コンプレックス＞の論理であるが、それが南部人の精神の闇の部分が構築したイデオロギーの産物であることは明

らかであろう。この一節は再建期における白人の暴力の理由を説明するという文脈に属しているのだが、南部人の<レイプ・コンプレックス>の論理を説き明かしたからといって、もちろんキャッシュが暴力を正当化しているわけではない。むしろ、<レイプ・コンプレックス>の錯綜した糸を解きほぐすことによって、キャッシュは南部人の暴力の論理を解体しようとしているのである。その際キャッシュは、南部人が盲目的にこうした幻想を築きあげ、それに支配されるさまをやりきれぬ思いで見ていながら、つねにそのまなざしに寄り添うようにしていた。南部人の精神の暗部はキャッシュ自身の精神の暗部であることを自覚していたからだ。たしかにキャッシュは、南部女性の神話にしろ、<レイプ・コンプレックス>にしろ、それを構築する南部人の無意識的な思考や感情に斬新で見事な論理を与えながら、そうすることによって結果的には南部女性をその論理のなかに閉じこめてしまっている。神話を突き破る、ないしはそれを超えたところに存在し得る、また存在するはずの女性の姿に気づかず、またそうしたヴィジョンを思い描くことすらできなかった。たしかにキャッシュが南部人というとき、そこからは黒人も女性も除外されていた。その点はすでに触れたとおり、キャッシュの限界であった。しかし彼が南部人の精神を凝視することによって暴きだした精神の闇のメカニズムは、普遍性を獲得してもいたのである。

IV

こうしてみると、キャッシュは南部の歴史を語りながら実はみずからの内面のドラマを語ってもいたといえるだろう。これはすぐれて文学的な営みであるといってよい。『南部の精神』が正統的な歴史研究としては欠陥だらけだということはすでに述べたとおりである。出版後50年以上を経た現在、この著作がなお読み継がれていくとすれば、それは歴史研究としてではなく、むしろ歴史を語りながらその背後で演じられている内面のドラマのせいということになるかもしれない。Anne Goodwyn Jones がその挑発的なキャッシュ論 で述べているように、そもそも歴史の叙述というものが歴史家と離れて客観的に存在し得るものかどうか、原理的には疑わしい面もある。歴史は歴史を書く者の多かれ少なかれ主観的な構築物とみなすこともできよう。その場合歴史とフィクションの境界線はそれほど明確なものではなくなるだろう。[36] とすれば、この境界領域をかりに<ヒストリカル・ナラティヴ>と呼ぶとして、その叙述の分析、とくにそのライティングの方法に着目した緻密な読みが、これからのキャッシュ読解には必要かもしれない。『南部の精神』は物語への強い志向性を潜在させているからである。ジョーンズのキャッシュ論はその貴重な試みとしておおいに参考になるが、自分なりの<ヒストリカル・ナラティヴ>分析の試みは今後の課題としておきたい。

注

1) Richard H. King, *A Southern Renaissance: The Cultural Awakening of the American South, 1930-1955* (New York: Oxford UP, 1980), p.153, 160-161.
2) Bruce Clayton, *W.J. Cash: A Life* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1991), p.162.
3) James C. Cobb, "Does *Mind* No Longer Matter? The South, the Nation, and *The Mind of the South*, 1941-1991," *Journal of Southern History*, Vol. LVII. No.4 (Novemb-

er 1991), 681-718.
4) Jack Temple Kirby, "Passion and Discontinuities: A Semicicle of *Mind*, 1941-1991," *W.J. Cash and the Minds of the South*, ed. Paul D. Escott (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1992), p. 209.
5) Cobb, 684-685.
6) W.J. Cash, *The Mind of the South* (1941; rpt. New York: Vintage Books, 1991), pp. 372-373. 以下、この著作からの引用はこの版により、頁数は本文中に記す。
7) 小谷耕二「ウィルバー・J・キャッシュ覚書」『言語文化論究』No.5（平成6年3月）19頁。
8) Cobb, 684.
9) H.L. Mencken, "The Sahara of the Bozart," *Prejudices: A Selection* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1996), pp. 69-82.
10) Cobb, 682.
11) C. Vann Woodward, "The Elusive Mind of the South," in Woodward, *American Counterpoint: Slavery and Racism in the North-South Dialogue* (Boston: Little, Brown, 1971), p. 263.
12) Cobb, 686, 688.
13) Cobb, 688-689.
14) Woodward, "White Men, White Mind," *The New Republic* (December 9, 1967), 28-30; "W.J. Cash Reconsidered," *New York Review of Books* (December 4, 1969), 28-34; and "The Elusive Mind of the South," *American Counterpoint*, pp. 261-283.
15) C. Vann Woodward, *The Burden of Southern History* (1960; revised edition; Baton Rouge: Louisiana State UP, 1991), p. 6.
16) Woodward, "The Elusive Mind of the South," p. 267.
17) 小谷、前掲論文、19頁。
18) Quoted in Cobb, 692.
19) Cobb, 695, 701-702.
20) Cobb, 711-714.
21) Michael O'Brien, "W.J. Cash, Hegel, and the South," *Journal of Southern History*, XLIV (August 1978), 381.
22) Elizabeth Jacoway, "The South's Palladium: The Southern Woman and the Cash Construct," in Escott, *W.J. Cash and the Minds of the South*, pp. 125, 131.
23) 小谷、前掲論文。
24) Michael O'Brien, "A Private Passion: W.J. Cash," in O'Brien, *Rethinking the South: Essays in Intellectual History* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1988), pp. 179-180.
25) Edward L. Ayers, "W.J. Cash, the New South, and the Rhetoric of History," *The Mind of the South: Fifty Years Later*, ed. Charles W. Eagles (Jackson: The Univ. Press of Mississippi, 1992), p. 120.
26) Lacy K. Ford. Jr., "Commentary" on James L. Roark, "'So Much for the Civil War': Cash and Continuity in Southern History," in Eagles, *The Mind of the South: Fifty Years Later*, p. 102.

27) Nell Irvin Painter, "Race, Gender, and Class in *The Mind of the South:* Cash's Maps of Sexuality and Power," in Escott, *W.J. Cash and the Minds of the South*, pp. 88-111.
28) Ford, "Commentary," p. 102.
29) Painter, "Race, Gender, and Class in *The Mind of the South*," pp. 88-89.
30) Bruce Clayton, "The Proto-Dorian Convention: W.J. Cash and the Race Question," *Race, Class, and Politics in Southern History*, eds. Jeffrey J. Crow, Paul D. Escott, and Charles L. Flynn, Jr. (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1989), pp. 260-280.
31) John Shelton Reed, "*The Mind of the South* and Southern Distinctiveness," in Eagles, *The Mind of the South: Fifty Years Later*, p. 144.
32) Bertram Wyatt-Brown, "Introduction," in W.J. Cash, *The Mind of the South*, xv-xvii.
33) Wyatt-Brown, "Introduction," xvi.
34) Painter, "Race, Gender, and Class in *The Mind of the South*," pp. 98-101.
35) Bertram Wyatt-Brown, "Commentary," on Reed, "*The Mind of the South* and Southern Distinctiveness," pp. 157-158.
36) Anne Goodwyn Jones, "The Cash Nexus," in Eagles, *The Mind of the South: Fifty Years Later*, pp. 24-26.